

〔泌尿紀要10巻4号〕
〔昭和39年4月〕

泌 尿 器 科 紀 要

第 10 巻 第 4 号

昭和 39 年 4 月

随 想

泌尿器科紀要編集部時代の感想

山口医科大学教授 仁 平 寛 巳

京都大学助教授時代の2年間、泌尿器科紀要編集部として稲田教授の下で事務的な仕事をして来たので、毎月送られて来る雑誌を手にとると非常に懐しい思いがする。なにしろ編集事務という仕事は初めてなので随分ととまどい、なかでも校正には大変に苦勞して、時には著者校正をもう少し充分にやつてくれたらと嘆いたこともあつたので、その頃感じた事を雑然と並べることにする。論文を書き慣れた人にはわかり切つた事であるが、不慣れな投稿者には盲点とも言える事柄がかなりあるので、失礼の段はお許しを願うとともに、稲田教授の編集方針は現在もそう変つてはいないだろうから、今後の投稿者の方に幾分でも参考になれば幸いである。

著者が校正を受取つた時に、誤植が多いとうんざりすると思う。しかしながら印刷所の植字工は原稿を読むのではなく字を見ながら反射的に活字を拾つてゆくのであるから、誤植の多少は勿論植字工の熟練の程度にもよるが、その責任の一半は原稿の文字にある。従つて上手な字で乱暴に書き流してあるのよりは、下手でも丁寧に書かれた原稿の方が医学の門外漢が活字を拾うのに誤りが少いのは当然である。編集部が原稿を印刷所に渡す前に行う仕事は、植字工が見誤りそうな字を訂正すると、附表、附图等を挿入する個所を原稿用紙の欄外に書き込む事である。原稿を読みながら、この辺に入れたらいいだろうと書き入れてゆくわけであるが、果して著者の意図にそつているかどうか心配になる。従つて文章の中に(表1)、(図2)等と書き入れると同時に、著者が挿入を希望する個所の欄外に赤字でわかり易く記して置くことが必要である。ただしこれは表と凸版に限るのであつて、写真版はアート紙を倅約して掲載料を出来るだけ少くするために、特に挿入個所を指定しないものは一括して掲載することになっている。普通はアート紙1頁に4×6cmの大きさのものを説明文(この文章があまり長文でない限り)とともに6枚掲載出来るから、融通がつく場合は写真版の数を6又は12の倍数にして下ざると著者には掲載料が少なくてすむし、編集部はまとめ易いのでお互いに好都合である。勿論指定の場合は、その個所に1枚づつ挿入するが、アート紙の使用量が増加するので、必然的に掲載料も高くなることを覚悟していただかなければならない。普通は写真版の大きさは4×6cmのものであるが、これも特に大きく鮮明に出したい場合は、1頁に2枚の大きさ等と注文して下されば、そのように取り計らう筈である。また組織の写真のようにすべて横に細長い版でもいい写真で、しかも説明の文章がいずれも2行以内ですむ場合は、4×6cmの大きさのものを1頁に8枚掲載出来るから、その旨を附記して置けば写真が多い時に使用するアート紙をかな

り節約することが出来る。ただしX線写真のように縦に細長いものが混じると1頁に8枚は無理で、6枚しか入らないことになる。それから写真版を一括掲載した場合に、大体原稿の何頁から何頁の間に入れて欲しいと記してあれば、出来るだけ御希望にそう答である。ただこの場合に写真版が1頁或はその整数倍の頁にきちんと入らないと、御注文に応じかねることもあると御承知置き願いたい

附図の中で凸版になるもの(グラフ、模型図、熱型図等の如き線画版)はアート紙を必要としないので、文章の中の適当な個所に挿入するが、この原図は製図のように手間をかけて丹念に画いてなくても結構である。鉛筆画きでもよいから、わかり易く書いてある方が有難い。凸版は原図の何分の1かに縮小して印刷されるが、同時に図の中に書き入れている文字も縮小される。この場合に文字の大きさをどの位にしたらいいか素人にはわかり難いので、凸版は必ず印刷所の製図専門家が清書したものから作製している。清書は原図をそのまま写し取るので不必要な点や線がないように、また中の文字の位置もよく考えて原図を作る必要がある。出来上った凸版は校正でその一部分を除くのはいいが、修正というようになると簡単には出来ない。著者校正で凸版の中の文字を訂正されると、製図の専門家が清書し直してから凸版を再び作製する、つまり部分的に修正するわけにはゆかずに凸版全体をもう一度作り直すことになるから、発行が迫っている時には御希望に応じかねる。従つて図は勿論のこと、中に書き込む文字も後になつて変更しなくてもよいように充分に考えて、そして医学的知識の全く無い人が清書するのだから間違えられないように特に丁寧にはつきりと書いていただきたいのである。

原稿の文字は門外漢が見てもよくわかるように書くことが必要であるが、外国語は特に間違い易いので必ず活字体で書くか或はタイプライターを使用していただきたい。そして字がよくわかるだけではなく、大文字と小文字の区別も直ちに判別出来ないと困る。酸性度を示すpHがPHとなつたり、mEq./L.やmOsm./L.等の誤植は、罪は著者の書体にあるのであつて植字工を責めるのは酷である。それから重量のgramを示すのによくgr.と書いている方があるが、gr.はgrain又はgrossを現わすものでgramはg又はgmと省略するのが正しいから御注意願いたい。また引用文献の雑誌名の記載が不正確なことが多く、よく引用される日本泌尿器科学会雑誌や泌尿器科紀要は、夫々日誌や泌紀要ではなく日泌会誌とか泌尿紀要というように正しい省略名で書いていただきたいものである。

文章の行のかわり目に外国語が来た場合に、途中で2つに分けるのには音節のさかいで切ることになつている。慣れた植字工ならこの点をわきまえているが、時によるとゆきあたりばつたりに切つていることもあるから、著者校正の際にspellingだけでなく、この点にも気をつけていただきたい。例えばdi-la-ta-tion或はsup-pu-ra-tive等の如くhyphenの入った個所で切るべきで、疑問の場合は辞書を引いて確かめる位の注意が欲しいものである。また数字が途中で切れているのはおかしいことで、1964年が1-964年なんてことにならないように校正の時によく注意していただきたい。

編集部で行う校正は、著者校正のとおり直つていようかどうかを注意すればいいわけである。ところが実際は上述の諸点の外に論文の標題や所属、附表や附図の説明、引用文献等の部分に著者の見逃している誤植がかなりあるので決して安心は出来ず、教室員が分担してもう一度著者校正のつもりで綿密に校正をやり直していた。だから或る教授から泌尿器科紀要は誤植が非常に少いという批評をいただいた時は、教室員の陰の努力の賜と大変に嬉しかつたものである。